

蘇芳集

惠

方

青山

丈

靴下を引つ張り上げて三の酉
十二月鳥居が赤くなくなつて
北窓を塞いだ日から北になる
離れるともう離れてる石路の花
ペランダの二日の雀とび立てり
太箸で黒豆を取るうれしさよ
恵方へと歩いて恵方より帰る

みやこどり

峰岸よし子

佗助や午後へうする空の青
波郷忌の触れなばひびくやうな月
冬に入る古き机をよりどころ
セーターをほどくや過去を消すやうに
一病と付きあふ葛湯吹きにけり
みやこどり言問ふほどに近寄り来
枯菊をくくりし紐のあまりけり
はつふゆ

宮尾直美

鬼の子の落ちて乾くや石の上
戸障子のよくすべる日よ鶺鴒高音
木の椅子を引けばことりと冬に入る
はつふゆの巻いては緩ぶオルゴール
冬耕の土より昏れて来たりけり
しゆるしゆると葉缶の湯気や初しぐれ
立ち読みの一書を得たり一葉忌

竜泉三丁目

八木下 末黒

美しい水

小川 美知子

三の酉明日に熊手の積込まれ
蒲団干す此処は竜泉三丁目
一葉忌旧居の町の指物師
日向ぼこ傍に一葉記念館
竜泉と三ノ輪を歩く石路日和
黄落や墓石ひしめく浄閑寺
かつて師と投込寺に年忘れ

ポインセチア白

吉田 幸敏

翳りさへ

木内 憲子

時雨忌や湖のはうへと駅を出る
竜泉の床屋の角の干蒲団
子離れのなりたるポインセチア白
存念も解脱もまざと紅葉散る
十二月八日カナリヤはもう要らぬ
かうやつて枯木になつてゆくいてふ
笹鳴の取り巻くまでを坐してゐる

ゆく秋と思ひて逝かす水一縷
息ひとつ吐けば花ひひらぎ翳る
ゆふがたと花ひひらぎが匂ひけり
はつ冬の高きところに風が吹く
はつふゆといふ翳りさへ愛しめる
また同じ世を生きたしや冬さうび
極月のしんじつ赫き薔薇の棘

ひいき力士

小島みつ如

秋惜しむ

下平直子

小春風迎へ車に両手振り
山里の何処も美しき落葉みち
笑みつくり霜月生まれ撮られけり
ゆるゆると杖つく音や毛糸帽
日向ぼこ妻子の分も生くるとふ
餅焦がすひいき力士の勝ち名のり
読書終ふ強き漁火窓に冴え

朝市

清水裕子

水澄めり

富田正吉

朝市の幟の朱文字十二月
落葉踏む音よこの世の音として
樹のぬくみ諸手に包むクリスマス
池に落葉るい累と志賀直哉邸
ひとの句碑よむ皂莢の実が鳴るよ
晩学の机上に冬日燦々と
鍵盤を指が走るよ月の夜は

駅前の梨売りの顔暮るるなり
露の夜の卓に両手をつけて立つ
はたらかぬ頭のために胡桃割る
亡きひとに呼ばるるやうに水澄めり
鶏頭に何かを云つて遣らないか
赤ん坊が泣くところにも曼珠沙華
ひと眠りして初鴨を見にゆかむ